

『竹取物語』の「月」に関する一考察

―かぐや姫はどこへ昇天したのか―

文学研究科国文学専攻博士後期課程三年 市東 あや

一.

『竹取物語』終盤、かぐや姫は自身が月の都の人であることを翁に告白し、八月十五日の夜、やってきた迎えと共に去ってゆく。話の筋から推測すれば、迎えがやって来るのは月の都からであり、またかぐや姫自身も月の都へ帰って行くのだと容易に考えられるだろう。

しかし、実際に『竹取物語』本文をみていくと、「月」の用例には不自然な偏りがあることに気付かされる。以下、試みに全用例を掲出する（注1）。

・かぐや姫、月のおもしろう出でたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の「月」の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたまふ。

七月十五日の月のいでゐて、せちに物思へる気色なり。近く使はるる人々、たけとりの翁に告げていはく、「かぐや姫、例も月をあはれがりたまへども、このごろとなりては、ただごとにもはべらざめり。いみじく思し嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせたまへ」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なんでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまにて月を見たまふぞ。うましき世に」
（六三頁）

・翁、「月な見たまひぞ。これを見たまへば、物思す気色はあるぞ」といへば、「いかで月を見ではあらむ」とて、なほ月いづれば、いであつつ嘆き思へり。夕やみには、物思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆き、泣きなどす。
（六四頁）

・八月十五日ばかりの月にいでゐて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ。
（六五頁）

・「…おのが身は、この国の人にもあらず。月の都の人なり。」

∴」 (六五頁)

・かぐや姫のいはく、「月の都の人にて父母あり。∴」(六六頁)

・たけとり、泣く泣く申す、「∴人々賜はりて、月の都の人ま
うで来ば、捕へさせむ」 (六七頁)

・望月の明さを十合せたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見
ゆるほどなり。 (七〇頁)

・うち泣きて書く言葉は、∴脱ぎ置く衣を形見と見たまへ。月
のいでたらむ夜は、見おこせたまへ。 (七三頁)

『竹取物語』本文中の「月」の用例は十六例、すべてが終盤に集中している(注2)。初めて「月」の語があらわれるのは「三年ばかりありて、春のはじめ」、かぐや姫が月を見て嘆くようになってからのことである。その後も「月」はかぐや姫が仰ぎ見て嘆くもの、それを見た周囲が気遣い咎めるもの、もしくはかぐや姫の出身地である「月の都」という言葉でのみ用いられている。

そして、当の八月十五日には、「月」は一切描かれていない。「望月の明さを十合せたるばかりにて」は迎えがやってくる際に周囲が明るく輝いたことを示す比喻表現であって、実際に月が明るく輝いているとは書かれていない。「月の出でたらむ夜は、見おこせたまへ」も、かぐや姫の翁らへの書き置きに書かれた言葉であって、実際に照っている月を指したものではない。「見おこす」は視線をそちらへやっつて見つめるといふ意味なので、つまりは月の出た夜にか

ぐや姫の去った先をまた見やつてほしいという文意であろう(注3)。もしもかぐや姫が月へ帰ったというならば、その帰った月を見つめたとしても何ら不自然なことではないが、ことはそう単純ではない。昇天の場面に实景の「月」を指す用例がないことは、かぐや姫が帰った先が月であると作中には明示されていないということである。

かぐや姫を迎えに来るのは「この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々まうで来むず」(六五頁)とあるので、月の都の人々であることは確かである。しかしその登場は「大空より、人、雲に乗りて下り来」(七〇頁)るといふものであり、実際に月からやってきたかは定かではない。かぐや姫自身もまた「車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ」(七五頁)と、昇天していった先を具体的に示していない。帝も「いづれの山か天に近き」(七六頁)と「月」ではなく「天」に近い山を示して葉を焼かしている。かぐや姫が月の都へ帰ったという筋書きは、実際の『竹取物語』本文の上からは判然としないのである。

この疑問点については、妹尾好信氏がいち早く指摘している(注4)。妹尾氏は「月」の用例が終盤になって唐突になって現れたのを作者の意図的な演出とし、一方で昇天の場面とそれ以降には「月」の用例が消えることから、成立当初はかぐや姫が月へ帰ったという読者の意識が希薄であったという可能性を考えた。その上で、『源氏物語』や『夜の寝覚』など後続の物語、『今昔物語集』『海道

『源氏物語』等の竹取説話の用例を精査し、それらが「空に昇る」「天に昇る」と記述していることを指摘した。妹尾氏の調査によると、この記述は『孟津抄』などの古注釈、『風葉和歌集』の詞書においても同様であり、恐らく『竹取物語』成立後しばらくは、かぐや姫は「天に昇った」という認識が広く定着していたものと思われる。

『源氏物語』をはじめとする平安時代の物語作者たちが目にしていた『竹取物語』は、かぐや姫は「天人」であり、「昔の契りありけるにより」翁のもとに下された。それが「帰るべきにな」ったので、八月十五日の夜に「天」から迎えが来て、「天の羽衣」を着て「昇天」したという筋書きの物語だったのでなかったか。

妹尾氏の調査によれば、かぐや姫が「月の都へ帰った」旨の記述があらわれるのは十五世紀後半になるといふ。かぐや姫の昇天において「月」の語が強調されていないことは、長らく『竹取物語』読者の共通認識であった。『竹取物語』本文用例の偏り具合を見るに諸なることであろう。

しかし一方で、かぐや姫は天に昇ったとして「月の都に帰った」という顛末を切り捨ててしまうと、今度は昇天の日時が八月十五夜に設定されている理由に悩むことになる。『竹取物語』本文のほか、『源氏物語』や『孟津抄』にも「八月十五日」の語が出ており、こ

の日時に関しては認識が揺らぐことがない。だが、昇天の日時を八月十五日という名月の夜に設定しておいて、その月を無視して天へ昇るといふのは、少々不自然ではなからうか。

また、かぐや姫の昇天は、いうまでもなく『竹取物語』のクライマックスにあたる場面である。随所に語源譚を入れるなどして前述の言葉を拾ってゆく『竹取物語』で、クライマックス直前にわざわざ告白させた主人公の素性が取り沙汰されないまま終わるとは考えにくい。逆に、かぐや姫が故郷の「月の都」へ帰るのであれば、昇天の際には地の文にも「月」を描き、かぐや姫が空に照る「月」へ帰っていく情景を読者に強く印象付けてクライマックスを締めくくることが演出として自然である。

八月十五夜という名月の夜に「天」へ昇るのか、月が全く出ない中「月」へ帰るのか。いずれにせよそこには、何かしら作者の意図が見え隠れしているように思われる。本論はこの不審点の解決のため、かぐや姫昇天の場面を、主に「月」と「天」に関する表現の点から再検討してゆくものである。

二.

改めて、かぐや姫昇天の場面を検討していく。月の都から来ているはずの迎えが「月」からやって来ないことについては先に述べたとおりである。昇天の場面では迎えは「天人」と書かれており、や

つてくるのは「空」であった。

かかるほどに、宵うちすぎて、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明さにも過ぎて、光りたり。望月の明さを十合はせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がたるほどに立ち連ねたり。

《中略》

中将とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたまつりつれば、翁を、いとほし、かなしと思ひつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

本文中には「天人」の用例が七例あり、一例はくらもちの皇子の作り話に、残り六例は昇天の際に迎えの者達を指す語として用いられている。

- ・ 天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鏡を持ちて、水を汲み歩く。(三二頁)
- ・ 天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。(七四頁)
- ・ 一人の天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。…」(七四頁)
- ・ 形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。(七四頁)

- ・ 天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。(七四頁)
- ・ 壺の薬そへて、頭中将呼び寄せて奉らす。中将に、天人とりて伝ふ。(七五頁)
- ・ 車に乗りて、百人ばかり天人具して、のぼりぬ。

一例目の天人は、くらもちの皇子に山の名を尋ねられて「これは、蓬萊の山なり」(三二頁)と答えている。作り話ではあるが、道教や神仙思想の要素が窺える場面であろう。昇天の場面における「天人」も、天の羽衣や不死の薬など、道教を連想させる小道具を手している。「昇天」という言葉と合わせて注目しておきたい。

一方の「天」は三例、うち一例は「天の人」で月の都からの迎えを指す表現であり、実質的に「天人」と同語である。

- A. 翁のいはく、「かばかりまもる所に、天の人にも負けむや」(六八頁)
- B. 大臣、上達部を召して、「いづれの山か天に近き」
- C. 「駿河の国にあるなる山なむ、この都も近く、この都も近く、天も近くはべる」(七六頁)

Aは帝の派遣した兵を見て翁が発した言葉であり、かぐや姫を迎えに来る者達を指して「天人」と称する初めての例でもある。Bは昇天の後に帝が不死の薬を焼くための地を尋ねたもの、Cがそれに

応えたものである。「天人」と合わせて、かぐや姫の昇天と関係が深い語といえよう。

また、Aの場面は翁が帝に「月の都の人まうで来ば、捕へさせむ」と訴えた直後のことであり、帝も翁もかぐや姫が「月の都」の人であること、「月の都」から迎えが来ることは承知の筈である。にもかかわらず、この「天の人」を境に、『竹取物語』本文から「月の都」という語は消失する。以降、「月の都の人」は「天人」、かぐや姫の去った先はB・Cのように「天」と、それぞれ置き換えられている。

では「空」はどうか。「空」の用例は本文中に五例みられる。

- D. 旅の空に、助けたまふべき人もなきところに、いろいろの病をして、行く方そらも覚えす。(三二頁)
- E. これを、帝御覧じて、いとど帰りたまはむ空もなく思さる。(六三頁)
- F. 屋の上ををる人々にいはく、「つゆも、物、空に駆けらば、ふと射殺したまへ」(六八頁)
- G. 大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がたるほどに立ち連ねたり。
- H. 見捨てたてまつりてまかる、空よりも落ちぬべき心地する。(七三頁)

Fは迎えを撃ち落とさせようとする翁の言葉、Gは前掲したように迎えが到来した際の様子、Hは昇天しようとするかぐや姫の翁への言い置きである。これらも先の「天」「天人」と同様、かぐや姫の昇天に関係する用例である。

残るD・Eは慣用表現であって実景の空ではないが、これらも昇天との関係性が皆無とは言い切れない。Dはくらの皇子が作り話の中で、蓬萊の玉の枝を求めて彷徨っていた際の様子である。この直後、皇子は蓬萊山に辿り着き、「天人のよそほひしたる女」と出会ったことを語り始める。前述したように、この場面は昇天以外で唯一「天人」という語があらわれるところでもある。残るEは、帝がかぐや姫のもとを訪れた帰り、かぐや姫から贈られた文を見た際の様子である。この前後に「天人」という語は登場しないが、かぐや姫に強引に迫った帝は、かぐや姫が「おのが身は、この国に生れてはべらばこそ、使ひたまはめ」(六一頁)と言って「きと影にな」(六一頁)ったのを見ており、かぐや姫を「げにただ人にはあらざりけり」(六一頁)と認識している。かぐや姫が普通の人間ではない(月の都の人である)ことを知った直後ということもできよう。五例という数からは一概に断定はできないが、「空」はかぐや姫の素性告白と昇天へ向けて、読者に「天人」という語や存在を意識させるときに用いられる言葉と考えることもできるのではないか。「空」「天」といういずれも天空を指す語が、昇天の前後や天人に関係する場面に偏重して用いられている。妹尾氏の調査にみられる

「空へ昇る」「天へ昇る」の表現とも符合する。昇天に係する語として、「月」同様に用い方の調整が行われていると考えてよいだろう。

一方で、昇天の際に用いられる「天」「空」と、昇天の際に消滅する「月」は明らかにその用法を異にしている。かぐや姫の昇天とそれを示唆する場面に用いられる「天」「空」に対し、「月」は昇天そのものではなく「月の都」を導き出すために必要な素材として使われ、昇天の場面では用いられていなかった。その「月の都」もまた昇天の場面では登場せず、「月の都の人」は「天人」へと置き換えられている。「空」「天」と「月」「月の都」とは、語の用いられ方では対立するような形となっているといつてよいだろう。本文の表現の上では依然、「月」を見て嘆く「月の都の人」かぐや姫が、八月十五日に「天人」と共に「空」もしくは「天」へ昇るといふ不自然な構図のままである。

三.

このように「天」「天人」と置き換えられる「月の都」とは、そもそもどのような場所として捉えられていたのか。いずれも後続のものにはなってしまうが、まずは『竹取物語』以外の物語作品から用例を蒐集し検討する。『源氏物語』には二例の「月の都」が確認できる。いずれも和歌の歌語としてであり、その場には「月」があった。

I.

月のいとほなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく、所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。

《中略》

をりをりのこと思ひ出でたまふに、よよと泣かれたまふ。「夜更けはべりぬ」と聞こゆれど、なほ入りたまはず。

見るほどぞしばしなぐさむめぐりあはん月の都は遙かなれども

(須磨・二〇一頁)

J.

尼君ぞ、月など明き夜は、琴など弾きたまふ。少将の尼君などいふ人は、琵琶弾きなどしつ遊ぶ。「かかるわざはしたまふや。つれづれなるに」など言ふ。

《中略》

月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつつさまさまの物語などするに、答ふべき方もなければ、つくづくとうちながめて、

われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに

今は限りと思ひはてしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でられず、ただ、親いかにまどひた

まひけん、乳母、よろづに、いかで人並々になさむと思ひ
焦られしを、いかにあへなき心地しけん、…

(手習・三〇一頁)

Iは八月十五日、須磨に退去している光源氏が、都を思いやって詠んだ歌である。「殿上の御遊び恋しく」とあることから、思慕する先は京の都であることが明らかだが、日付が八月十五夜と明言されている点には注目しておきたい。Jは尼君のもとで自身を顧みる浮舟の歌である。周囲は管弦や詩歌、物語を楽しんでいるが、話に混ざれない浮舟は都に残してきた母や乳母を思う。

双方の例に共通しているのは、詠者は遠く隔たった「月の都」を懐かしむ側であること、「月」の美しい夜であること、そして「月の都」すなわち都を想起する契機の一つに管弦があるということである。Iでは「殿上の御遊び」を懐かしく思い出し、Jでは都の出身であろう尼君達が月の夜に琴や琵琶を弾いていることが示唆されている。

では他作品の例ではどうか。『狭衣物語』では管弦の宴で狭衣が笛を吹いた際の様子に「月の都」の語がみられる。

宵過ぐるままに、笛の音いと澄みのぼりて、雲のはたてまで
もあやしう、そぞろ寒く、もの悲しきに、稲妻のたびたびして、
雲のたたずまひ例ならぬを、神の鳴るべきにやと見ゆるを、星

の光ども、月に異ならず輝きわたりつつ、御笛の同じ声に、さ
まざまの物の音ども空に聞こえて、楽の音いとおもしろし。

《中略》

音のかぎり吹きたまへるは、げに、月の都の人もいかでか聞き
驚かざらん。

楽の声、いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御
子、角髪結ひて、言ひ知らずをかしげに香ばしき童にて、ふと
降りぬたまふと見るに、糸遊のやうなる薄き衣を中将の君にう
ち掛けたまふと見るに、我はこの世のこともおぼえず、めでた
き御ありさまもいみじうなつかしければ、この笛を吹く吹く帝
の御前にさし寄りて、参らせたまふ。(巻一・四三頁)

管弦の宴で狭衣が吹いた笛の音は類まれなる美しさであった。帝に乞われるままに狭衣が笛を吹いていると空模様が怪しくなり、天稚御子が降臨し、狭衣に衣を着せて天に連れ去ろうとする。この前後の場面には、衣の例を含めて『竹取物語』を意識したと思われる表現が随所にみられるが、「月の都」という言葉は天上まで響く音色を表すために使われており、降ってきたのは月の都の人でも天人でもなく「天稚御子」である。また、この日は五月五日で、天気が悪く「月」は出ていなかった。「月の都」と「月」の関係は途絶えている。ただ、狭衣が管弦の宴で笛を吹いていたこと、その音色のために天稚御子が降臨し、狭衣を連れ去ろうとしたことには留意して

おきたい。「月の都」はやはり管弦の場で想起される語と考えてよ
いだろう。

もう一例、『夜の寢覚』から「月の都」の例を掲出する。

またかへる年の十五夜に、月ながめて、琴、琵琶弾きつつ、格
子も上げながら寝入りたまへど、夢にも見えず。うちおどろき
たまへれば、月も明け方になりにけり。あはれに口惜しうおほ
え、琵琶を引き寄せて、

天の原雲のかよひ路とちてけり月の都のひとも問ひ来ず

(卷一・二〇頁)

主人公である中の君は、八月十五夜に夢の中で「髪上げうるはし
き、唐絵の様したる人」(十七頁)に琴を習う。それが二年続いた
が、三年目の八月十五夜には夢を見ることはなく、人物の訪れもな
かった。夜明けに目を覚ました中の君は、琵琶を弾きながら和歌を
詠む。この歌によって、訪れていた人物が「月の都」の人である
(少なくとも中の君がそう認識している)ことが読者に知れるので
ある。

以上の例から考えるに、「月の都」は管弦の演奏と関係の深い語、
少なくとも当時はそう認識されていたであろうことが窺える。現在
地からは遠く隔たった地であり、多くは八月十五夜など月の美しい
夜、何らかの楽器を演奏することによって、「月の都」という語が

物語上に想起される。そしてそれは、浮舟や中の君の例を考えるに、
思慕する対象でこそあれ、迎えがやって来たり帰って行ったりとい
う行為には必ずしも関係していない。

ところで、妹尾氏は「月の都」という語を「中国の古伝説に見え
る「月宮」の訳語としている(注5)。一般的に「都」とは「宮
処」の義と考えられるから、「月宮」と「月の都」はほぼ同義とみ
てよいだろう。

「月宮」は『太平広記』などの説話集に神仙譚として登場する。
いずれも唐の玄宗皇帝が道士に連れられて、月にある「月宮」へ赴
き、そこで奏されていた曲を聴いて書き取り、持ち帰って地上でも
演奏していたという逸話を示すものである。遠く隔絶されてはいる
が行き来が不可能ではない場所、八月十五日の夜、天人が管弦を奏
すという三点において、「月宮」の説話と先掲の物語の例とは共通
しているといえる。

・開元中、中秋望夜、時玄宗於宮中翫月。公遠奏曰、「陛下莫
要至月中看否」、乃取拄杖、向空擲之、化為大橋、其色如銀、
請玄宗同登。約行數十里、精光奪目、寒色侵人、遂至大城闕。
公遠曰、「此月宮也」。見仙女數百。皆素練寬衣。舞於広庭。
玄宗問曰「此何曲也」。曰「霓裳羽衣也」。玄宗密記其声調。

(『太平広記』神仙二十二・羅公遠)

・又嘗因八月望夜、師与玄宗遊月宮、聆月中天樂。問其曲名、

曰「紫雲曲」。玄宗素曉音律、默記其声、婦伝其音。名之曰霓裳羽衣。自月宮還、過潞州城上、俯視城郭悄然、而月光如昼。

(『太平広記』 神仙二十六・葉法善)

この他、道士や楽の部にも同様の説話が収載されているが、紙幅の関係から割愛した。

引用した『太平広記』は北宋時代の成立だが、末尾に『神仙感遇伝』などの引用元を記しており、これらの成立は唐代まで遡れるとみられる。よって、『竹取物語』成立時にこの説話が日本へ伝わっていた可能性も十分に考えられよう。

すなわち、「月の都」という言葉は、玄宗皇帝の話から「月宮」の要素を受け継ぎ、かぐや姫の素性として『竹取物語』に加えられた可能性が考えられるのである。玄宗の「月宮」は道教や神仙思想のもとに書かれた説話であるから、その訳語である「月の都」も、そうした意味合いを持って用いられている可能性が高い。『竹取物語』が多くの漢籍を典拠として書かれていることは周知の通りであるが、中でも昇天の場面においては道教関連の書物からの影響が多く指摘されている。

たとえば全体的な話型としては『漢武帝内伝』の翻案ないし換骨奪胎であろうとする指摘がある。渡辺秀夫氏はその具体的な類似点として、あらかじめ仙人(『漢武帝内伝』では西王母)が来臨の日

付を告知する点、不死の薬を地上に残そうとする点、地上を汚濁の悪所とする点、天人降臨の際に周囲が光彩に満ち溢れる点、授かった不死の法を焼失する点の五点を挙げた(注6)。ただし氏の論では「不死薬の獲得が最大の目的である」としており、薬をもたらす仙人の立ち位置を竹取翁、地上で仙界を望む立ち位置を帝としている。かぐや姫は帝と婚姻することで帝に不死薬をもたらすための存在であり、昇天によってそれが不成立に終わる。論中ではこの一連の流れこそが『竹取物語』の主題であるとされ、昇天の意義や必然性については深く語られていない。

一方で、かぐや姫は仙人として昇天したのだとする論も存在する。安藤重和氏はまず「天人」と「仙人」が語の上で同義であることを確認、『竹取物語』に出てくる「天人」とは神仙譚に出てくる仙人や仙女と同一であろうと述べた。

そのうえで、かぐや姫が「車に乗りて」、すなわち空を飛ぶ車に乗って昇天したことについて、漢籍における仙人の昇天と特徴が一致することから、かぐや姫は地位の高い仙人として昇天していったのだと述べる。また、かぐや姫が不死の薬を口にし、天人が「天の羽衣」をかぐや姫に着せることについても、『太平広記』にみえる説話の例から、この一連の行動によって、仙人として地上を去る資格を得るのだろうと考察した(注7)。安藤氏は論拠の一つとして、先掲の『太平広記』神仙二十二の例を挙げてもいる。玄宗皇帝が見た「月宮」の仙女たちは皆「素練霓衣」を身に着けており、「霓裳

羽衣」という曲を演奏している。「天人」「仙人」とはこのような衣を着ている存在であり、昇天の際にかくや姫が着せられた「天の羽衣」とも重ねられると安藤氏は考察する。

このように昇天の場面において神仙思想の影響が数多く指摘される一方で、これらの論で「月宮」が言及されることは、先行研究においてはほぼないと行ってよい。その理由はひとえに、玄宗皇帝と「月宮」の説話が天人の話であつて昇天の話ではないということにある。玄宗皇帝は「月宮」へ行くものの、昇天はせず曲だけを携えて地上へ帰還してくる。羽衣や薬といったモチーフとも無関係である。また、神仙譚における昇天は多く「白日昇天」であり、夜に月の照る中昇天していく例は見つけ難い。同様に、「月宮」には確かに天人が住んでいるが、地上の人間が昇天して「月宮」に行くという説話も例がない。「月宮」と昇天は、本来無関係な要素なのである。

また、他の物語作品では必ず関連付けられていた「月の都」と管弦も、『竹取物語』では一切関係がない。昇天の際に楽の音が鳴っているような描写はなく、それどころかかくや姫が楽器を演奏する描写さえ皆無と行ってよい（注8）。かくや姫は「月の都の人」でありながら「月の都の人」が持つべき管弦などの要素を持たず、「月の都の人」がしないはずの「昇天」をする人物なのである。

四

かくや姫は逆説的な演出のもとにある人物である。「月」を見て嘆き、「月の都の人」であると明かしながら、「月」が出ているかどうか分からない情景の中、「月」かどうか分からない場所へ去ってゆく。「月の都の人」すなわち「月宮」で管弦をする天女でありながら、作中で一度も管弦はしない。「罪作り給ひて」地上へ落とされ、「罪の限り果て」て、「今は、帰るべきになりにければ」と言っているが、地上を去って行く先は故郷たる「月」ではなく、周囲の認識から考えて「天」である。本文中でも実際に去る時は「帰る」ではなく「のぼりぬ」という表現が用いられている。素性と背景は明確に提示されているが、それを裏付ける結果の部分が、作中の何処にも明言されていない。

であれば、昇天そのものについても逆説的に考えるべきであろう。かくや姫は「月の都の人」だから月へ帰った、のではなく、「月の都の人」だけでも「天」へ「のぼりぬ」、すなわち文字通り昇天したのである。帰郷ではなく昇天であるから、先行研究が指摘するようにその場面は神仙譚にみえる昇天と同じ手法をとる。一方で、帰郷ではないから殊更に「月」を強調する必要はなく、むしろ帰郷でないことを暗に仄めかすためには用いないほうが良かったのである。

かくや姫が「月」ではなく「天」に昇る理由としては、一つには

やはり物語のクライマックスを盛り上げるためであろう。『太平広記』によると、「月宮」には数百もの仙女がいる。「月の都の人」のかぐや姫も、素性を告白した時点は天人であり、同時に数百もいる大勢の中の一人に過ぎない。だが昇天の際は大勢の中の一人ではなく、昇天してゆく個人にスポットが当てられる。「月の都の人」だが多くの人を伴って昇天、という逆説的な手法をとることで、かぐや姫は一人の際立ったキャラクターとなり得るのである。

あるいは昇天の後に、帝が富士山で薬を焼くことも関係しているのかもしれない。渡辺氏は平安初期文人の間に神仙譚の浸透と展開があつたこと、その中で富士山が「元型としての崑崙を透視する神仙の山として把握されていた」ことを指摘する（注9）。神仙の山たる富士山は、「月」ではなく「天」を望む山であることが望ましかろう。かぐや姫と富士山は不死の薬の煙を通して繋がっている。かぐや姫が月へ帰った場合、直後の富士山の場面で「天に近き」とすると整合性が取れなくなってしまう。富士山が神仙にまつわる山という意識があるゆえに、不死の薬をもたらしたかぐや姫もまた「天」へ行かなければならなかったと考えることも出来る。

不死の薬を焼く山でありながら、富士山の由来は「土に富む」山であった。読者の意表を突くようなその命名展開は、「月の都の人」でありながら月の都へ帰らなかったかぐや姫と重ねることが出来る。「月の都の人」かぐや姫から受け取った不死の薬を「天に近き」富士山で焼くことで、読者に天と神仙、そして逆説的な「天人」かぐ

や姫の印象を強く植え付け、『竹取物語』は幕を閉じるのである。

注

1. 以降、物語本文の引用は全て『新編日本古典文学全集』（小学館）によった。引用の最後には、当該箇所が本論中に初出である場合のみ、頁数を付記した。

2. 『新編日本古典文学全集竹取物語』の底本は古活字十行甲本である。『九本対照竹取翁物語』にて諸本を校合した結果、用例数に多少の差はあるものの、本論と矛盾するような「月」の用例は確認できなかった。

3. 『日本国語大辞典』みおこすの項には「離れた所からこちらの方を見る。視線をこちらへ向ける」として、『竹取物語』当該箇所と『大鏡』天・序「たれも、少しよろしき者どもは、見おこせ、居寄りなどしけり」を用例として挙げている。『大鏡』の例は話をしている翁へ関心を寄せた人々が、視線をやったり近寄ったりしているといった意であろう。

4. 妹尾好信「かぐや姫の素性と「昇天」——現行『竹取物語』は中世の改作本か——」（『研究講座竹取物語の視界』一九九八年

五月・新典社)。

5. 4に同じ

6. 渡辺秀夫「竹取物語と神仙譚―文人と物語・〈初期物語成立史階梯〉―」(『日本文学』第三二号三卷、一九八三年三月)。
7. 安藤重和「竹取物語と神仙思想―「天の羽衣」の由来―」(『日本文化論叢』第二十号、二〇一二年三月)。

8. 本文中で管弦をしていると思しき箇所は、かぐや姫命名の際の「秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける」(一九頁)、五人の貴公子が難題のために集められた際の「日暮れるるほど、例の集りぬ。あるいは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは声歌をし、あるいは嘯を吹き、扇を鳴らしなどするに」(二三頁)の二箇所である。前者は「よろづの遊び」とあるので管弦もしただろうと思われるが、かぐや姫が「遊び」に参加している旨の文言がない。後者は貴公子達が行っていることで、かぐや姫は関与していない。また、世の男性達や帝が垣間見をしている場面などにもかぐや姫が何かを演奏している描写はなく、「光満ちてけうらにてるたる」(六一頁)ばかりであった。

9. 6に同じ

The exam of “Takatori-monogatari” - Where Kaguyahime went to

SHITO, Aya

Abstract:

At the end of "Takatori-monogatari", the "moon" is not drawn in the ascension scene of Kaguyahime, and the interpretation that she has returned to the moon is difficult to determine from the text. However, it is also difficult to call it ascension. Looking at this problem from the perspective of examples such as "moon," "heaven," and "moon capital," we notice that some of the expressions related to ascension are unnaturally switched. Kaguyahime may be a paradoxical person who "ascended" without returning to the "moon" while being a "person of the moon capital".